



「表現すること」

以前紹介しましたが、私は学生時代にロックバンドサークルに所属してベースギターを担当していました。それ以来現在まで、仲間と共に、様々な既存の楽曲をコピーして完成度の高い演奏を目指した活動を行っていますが、その演奏活動とは別に、オリジナル曲やカバー曲を録音して（多重録音で様々な楽器を加えながら）作品として形にすることも行っています。

私はもちろん、いわゆる「プロ」ではありません。曲を完成させることに何の意味があるのかと思われる方もいらっしゃるでしょうが、私はただ、自分の内面を自分なりに表現して、自分のために形として残したいだけです。

オーケストラのための交響曲を作曲したり、歌手のために作詞や作曲を手がけたり、ロックバンドでオリジナル曲を発表したり等、メディアを通して目にする職業としての「プロ」の仕事は、皆見事で圧倒されるものです。もちろんそれらは類い希な才能と、努力や訓練の賜であり、多くの人の心を豊かにしてくれる価値のあるすばらしいものですし、録音や演奏などの技術面でも、楽曲自体の完成度においても、極めて高度なもので、比較すれば、もちろん私などは足下にも及びません。

しかし、私も含めて、出来映えには関係なく、自分の言葉をメロディーに乗せて口ずさむとき、誰もが作詞・作曲をしているのだと思います。それは人間が本来持っている、「表現」方法の一つであり、レベルや比較とは無関係に、誰でも自由に行ってよいものです。

社会の成熟・巨大化・複雑化等の過程で、社会を維持するための生産的な分野で細分化・効率化・専門化が進みました。その流れはそれぞれの人間が元々個々に持っている自由であるべき表現活動の分野（美術・音楽・スポーツ等）にも及び、更に市場経済や情報化の進展と共に、各分野に特化して、比較において特に優れている者を頂点とした団体や組織が隙間なく社会を覆い尽くし、肥大化していると感じています。

※裏面へ続く

..... 切り取り線

子供たちのための、意見・提案・要望・校長に知らせたいこと など

2022年7月15日（ ）年（ ）組 児童氏名

※メールでも随時受け付けております。kosaki-k@sendai-c.ed.jp（校長直通）

それぞれの巨大なピラミッドには、「プロ（フェッショナル）」と呼ばれる頂点があり、多くの人々が関わる経済活動とリンクして商品化されています。更にマスメディアによって偶像化され、ピラミッド内で頂点を目指すことが人生の目的や成功の証として美化されるようにもなりました。そのそれぞれの巨大なピラミッドの存在価値は、「プロ」を目指す多くの人々と共に「アマ（チュア）」や「趣味」という形で活動する人々によっても支えられています。

本来自由であるはずの自己表現の分野に「プロ」や「アマ」や「趣味」「アーティスト」といった概念を持ち込んだのは、社会の中で私たちが作り上げた「システム」に他なりません。その中で頂点を目指すとする情熱や憧れや努力は純粹で曇りのないものだと思いますが、溢れる情報やシステム化された序列の中で、「諦め」や「しらけ」た気持ちになることもあるでしょう。このことは『自分たち（人間）が作り出した「システム」に利用され、「システム」に意思を委ねている状態』（※注釈1）ではないかと危惧しています。

「表現」することは、一部の特別に訓練されたり選ばれたりした者だけに許されている特別なことでも資格が必要なことでもありませんし、本来の目的は自己実現であり、集団の頂点を目指すためのものでもないと思っています。（その感覚を「趣味」と表現している場合もあるかも知れません。）

子供たちは今後の長い人生の中で、目標を持って努力し、それぞれに様々な職業を選択し、社会を支える人材として活躍していくことでしょう。中には、「プロ」として「表現すること」を職業とする人もいるかも知れません。しかし、職業に関わらず、潤いのある人生を送るために、一人一人が、人間が本来持っている「表現」する力、その喜びを忘れないでほしいと思っています。「文学」「絵画」「音楽」「写真」「映像」「舞踊（ダンス）」「書道」「手芸」「工芸」「料理」「武道」「スポーツ」「研究」などなど・・・人それぞれに数え切れないほどの様々な方法があるでしょうが、自分なりの方法で自分を表現すること（好きなことを諦めずに続けること）は、全ての人に与えられた自由です。対外的な評価のためでもなければ、「プロ」も「アマ」も「趣味」も関係ありません。

子供たちには、現代の高度に分化し専門化し商業化したシステムの中でも、自分の持っているものや自分の思いなどを自分のために伸び伸びと表現できる自由な心を失わないでほしいと願っています。

※注釈1：2009年にイスラエルの文学賞「エルサレム賞」を受けた作家の村上春樹さんが現地で行ったスピーチの一部（校長室便り2021年4月9日号にも掲載）